Tajlorinoj seĝo de radoj

昔々有るところに刺繡^{ししゅう}屋を営む三兄弟が居ました。

長男のカミューが刺繡を。

次男のギヌスターヴが接客を。

三男のアルフォンスが家事一般を。

これは三人で支え合いながら生活する或^ある庶民のお話。

第一章 仕立て屋仲間

ほんの数ヶ月前まで、この店は貴族も愛用する仕立て屋だった。しかし、どうした訳だか、どういう訳だか。この店で唯一の職人で長男のカミーユが、ある急ぎの仕事を終えてから、彼の脚は動かなくなってしまった。

脚が動かなくて、仕立ては出来ない。

仕立ての仕事を誇りにしていたカミーユのことを弟二人は甚く心配したけれども、カミーユは落ち込む様子も無く、こう言った。

「これからは、刺繍を仕事にしようかな」

それは強がりだったのかも知れない。けれども、カミーユは自分の言葉通り、弟の力を借りながら、刺繍の仕事を始めたのだった。

カミーユが歩けなくなり、刺繍で生計を立てるようになったある日の事、カミーユの元にある仕立て屋仲間がやってきたと、弟のギユスターヴが呼びに来た。

不思議に思い、一旦刺繍の手を止めて玄関まで車椅子を漕いでいく

と、確かにそこには仕立て屋仲間が一人立っていた。彼を見てカミーユは笑顔でこう言う。

「何の用？」

すると彼は縋るような声でカミーユにこう言った。

「俺の店、ずっと仕事が出来なくて、このままじゃ俺やっていけないんだよ……」

もうお金も無いし、今月生活するだけの金を借りたいと思って来たんだけど」

「どうやら、仕立て屋時代からすっかり貯金をしていたおかげで、貯蓄がたっぷり有るカミーユに助けを乞おうとやってきたようだが、カミーユは少しだけ困ったような顔をしてこう返す。

「うーん、そうだな。」

今更どの面下げて僕にそんな事言いに来られたの？」

その様子を見てギュスターヴは、カミーユが些かながらも怒っているなど思ったが、仕立て屋仲間はそのような事にも気がつかずにカミーユの膝に縋^{すが}って泣き言を連ねる。

カミーユは暫く困ったような笑顔のまま居たが、突然彼の頭に思

いっきり肘を落とした。

「何すんだよ!」

「自業自得って言葉知ってる? 大人しく帰れ」

「明日食べる物も無いんだよ、お前仲間を見捨てるのか?」

「都合の良い時だけ仲間に入れても困るんだけどねえ。」

まあいいや。ギウス、アルに言っ**て**バゲット二本とブレット三斤くらい持**つ**て来**て**」

「お、おう」

無心されたくらいでこんなにカミーユが怒る筈は無いと思ったギウスターヴだが、自分までカミーユの怒りをかうのは嫌なので、素直に一番下の弟でこの家の台所を預かっているアルフォンスの元に行き、パン類を籠に入れて持**つ**て来**る**。

それをカミーユに渡すと、カミーユはその籠を仕立て屋仲間の顔に押しつけながらこう言**う**。

「お金は貸さないけど、食べる物が無いならパンくらいはあげる。」

このパンを食べ**べ**尽**く**す前**に**何と**か**する事**だ**ね」

「なんだよ、この守銭奴!」

「守銭奴ねえ、無心しに來たくせにそんな事言える立場なんだ。凄いな」

「ここにことしたままカミーユがそう言うのと、仕立て屋仲間はパンの入った籠を持って、捨て台詞を吐いて帰って行った。」

その後、何故カミーユがああ仕立て屋仲間にあんな対応をしたのかをギユスターヴが訊ねると、こう返ってきた。

「え？ ああ、あいつの事助走付けて殴った事有るんだよね」

「兄貴がそんな事するなんてほんとあいつ何やったの？」

普段温厚で、弟のギユスターヴですら殆ど怒った所を見た事が無いカミーユの事を、そこまで怒らせた理由とは何なのか。

それを訊ねたら、どうやらあの仕立て屋は、店を継いで以来一度も納期を守った事が無いのだそう。

あの仕立て屋は、仕上がりだけを見ればカミーユの物よりも出来が良いし、仕事も丁寧だ。

しかし、だからといってそれが納期を破って良い理由にはならないとカミーユは言う。

「お、おう」

「作業が遅いなら遅いなりに、ちゃんと納期を長めに見れば良いのに、何度そう言っても出来るからって言ってる聞かなかつたんだよね。」

で、実際やらせると一度も出来た事がなくて、納期を破ったって言う報告を二十回くらい聞いた辺りで殴った」

「そ、それ、兄貴が殴る理由になるのかなあ」

「なるよ。あんまり納期破ってばかりなのが居ると、仕立て屋全体の信用が落ちちゃうし。」

それに、信用が落ちて困るのはあいつなんだから、ちゃんと納期守らせたかつたんだよね」

その説明にギョスターヴはなるほどと思うが、疑問が一つ。

「兄貴、それ、ちゃんと本人に言ったか？」

「うゝん。そう言えば全部まとめて『納期守れ』の一言で済ませちゃった気がする」

「あ、それ絶対伝わってないわ」

そんな話をした後、カミューはすぐに仕事に戻ると言って作業場へ行き刺繍枠を手に取る。

カミーユが仕事場に入ったのを確認したギュスターヴは、アルフォンスと一緒にパン屋へパンを買いに行ったのだった。

第二章 甘えん坊

夕食後、依頼品の刺繍物を分けていたカミーユ。大体依頼主毎に依頼品を分けられたので、そろそろ寝ようと作業場を出る。

すると、ドアの外には待っていたのかたまたま居ただけなのか、アルフォンスが立っていた。

「カミーユ兄ちゃん、そろそろ寝る？」

「うん。そろそろ寝るよ」

「じゃあ俺と一緒に寝ない？」

「もう、アルは甘えん坊だなあ。良いよ、一緒に寝よう」

カミーユが刺繍を仕事にし始めてから、寝る時間がだいぶ早くなった。

いつも深夜まで仕事をしていた仕立て屋の頃とは違い、時間にゆとりの有る生活になってからと言う物、アルフォンスがしきりに一緒に寝ようとせがむようになったのだ。

昔からカミーユに良く懐いては居たが、もしかしたら、両親を亡くしてからなかなか構えないで居たのが寂しかったのかもしれない。いくらか申し訳なさを感じながら、カミーユはアルフォンスに車椅子を押されて自室へと入る。

寝間着に着替え、ベッドに二人で横たわりながら取り留めのない話をす^たる。

次第にカミーユがうとうととしてきた所で、アルフォンスが上にのしかかかってこう言う。

「ねえ、カミーユ兄ちゃん、おやすみのキスしてくれよ」
「うん、いいよ」

上に乗ったアルフォンスの顔を両手で包み、カミーユは軽く頬にキスをする。

アルフォンスも、カミーユの頬にキスを返す。

すると、カミーユは微笑んでアルフォンスの頭を撫でた後、すぐに寝入ってしまった。

少しだけ、甘えん坊な弟の将来の事などを心配しながら。

翌朝、カミーユが目を覚ますと、既にアルフォンスは着替えを終えて側で待っていた。

「カミーユ兄ちゃん、着替えるの手伝おうか」

「いいの？　ありがとう」

アルフォンスの手を借りながら、着替えていて、ふと気がついた。カミーユの身体に痣のような物が付いているのだ。

胸の痣を見ながら、カミーユは困ったような顔をして呟く。

「あー、また虫に食われちゃったなあ。アルは食われてない？」

「俺も手とか腕食われてるけど、痒くないし大丈夫だよ」

「そう？　なら良いんだけど」

着替えを済ませ、車椅子に移った所でアルフォンスが顔を近づけこんな事を言う。

「カミーユ兄ちゃん、おはようのキスは？」

「もう、甘えん坊だなあ」

何時までも自分に甘えていたら恋人など出来ないのではないかとカミーユは心配になったが、やはり弟に甘えられる事自体は嫌ではないので、おやすみの時と同じようにアルフォンスの頬にキスをした。

朝食後、兄弟三人揃ってミサへと行ったのだが、帰り際に神父様がカミーユに声を掛けてきた。

「カミーユ君、このところはどうですか？
無理はしていませんか？」

「おかげさまで大丈夫です。でも、僕ってそんなに無理しているように見えますか？」

「少し前までの君は無理の塊かたまりだったんですけれどね……」
数ヶ月前まで仕事がある時は殆ど寝ずに、食事も適当に済ませていたことを知っている神父様が、その事を思い出したようで苦笑いをする。

ふと、神父様がカミーユの首筋に手を当ててこう言った。

「あれ？ また虫刺されですか？ こんな所にも痕あとが有りますよ」

「え？ そんな所にもありますか？」

「なんかまた食われちゃったみたいで……」

「アルも腕を食われたって言ってるんですよ」

「なるほど、そうなんですな」

納得した様子の神父様が、ちよいちよいとアルフォンスを手招きし、声を掛ける。

「こんなに頻繁に虫に食われるのは大変でしょう。効くかはわかりませんが虫除けのおまじないをしておきましょう」

「え？ 良いんですか、有り難うございます」

神父様の言葉に、アルフォンスは素直に胸の前で指を組む。それを確認した神父様は、祝福の言葉を掛け、胸の前で十字を切る。

その次に、神父様はカミーユと視線を合わせてカミーユにもおまじないを掛けるという。

素直におまじないを掛けられている訳だが、先程となにやら掛けている言葉が違う。

少し不思議に思いながら目を伏せ指を組んでいる訳だが、ふと顎を持ち上げられ、唇に柔らかい物が当たった。

驚いて目を開くと、目の前には神父様の顔がある。

「あの、神父様、一体何を……？」

「え？ おまじないを掛けただけですよ？」

「そ、そうですか、有り難うございます」

にこにここと笑う神父様にお礼を言うと、何故かギユスターヴがそくさと挨拶を残しカミーユの乗っている車椅子を押しして教会から出る。

アルフォンスを置いて行って良いのかと不安になってカミーユが後ろを見ると、何故だか不機嫌そうな顔をして、アルフォンスも早足で付いてきていた。

その様子を見たカミーユは、この後仕立て屋協会で仲の良かった人達が誕生日祝いに来てくれる予定だけれど、それまでにアルフォンスの機嫌が直るかどうかが不安になったのだった。

昼食後暫くして、カミーユの店を何者かが訪れた。

ギユスターヴが見に行った所、仕立て屋協会の面々だというので家中へと入って貰う。

やってきたのは、カミーユと同い年くらいの仕立て屋と、少し年下の仕立て屋達。

「みんないらっしやい。余りおもてなしは出来ないけど」

自分はもう仕立て屋ではないのに、こんな風に祝って貰えるのは有

り難いなど、カミィユはしみじみと思う。

仕立て屋仲間達が持って来たパウンドケーキやサングリアをみんなで分けて、ギユスターヴやアルフォンスも一緒にカミィユの誕生日を祝い、盛り上がる。

酒が入り盛り上がっている所で、カミィユが仕立て屋仲間達にこう訊ねた。

「そう言えば、このお礼は何が良いかな？　あまりたいした物は用意できないけど……」

呑んだせいか少しとろんとしたその言葉に、仕立て屋仲間はこう返す。

「そんな気にしなくて良いって。まあ、どうしてもって言うんなら、いつも通りチーズクッキー焼いてくれよ」

「そうそう。あのクッキー、酒のつまみに丁度良いんだよ」
「チーズクッキー？　うん、わかった」

お礼の話も一段落付き、また暫く盛り上がって夕食時。それぞれまた家で夕食を食べるからと解散になった。

玄関まで皆を送り、別れ際に頭を撫でられたり抱きつかれたり、

額にキスをされたりともみくちやになつたカミーユが仕立て屋仲間を見送り。

居間に戻るとアルフォンスの姿はなく、ギユスターヴだけがテーブルに着いていた。

「あれ？ アルはどうしたの？」

「腹減つてないだろうけど一応つて言つて、軽めの晩飯作りに行ったよ」「そっか」

そんなやりとりをしていると、カミーユのお腹がきゅうつと鳴く。

「なんだよ兄貴、あんなに食べたのに腹減つてんの？」

「あはは……お酒飲んでるとお腹空くんだよね」

二人で話をしている事暫く、アルフォンスが焼いたバゲットを持って来た。

その上には茹でたほうれん草やマッシュした豆を乗せ、チーズをかけた物が乗っている。

まあ、おつまみみたいな物だけど、と言いながらアルフォンスがそれをテーブルに置き、カミーユの隣に有る椅子に座る。

それから皆で食前のお祈りをして、バゲットに手を伸ばす。

ふと、アルフォンスが手に取ったバゲットを一口大にちぎり、カミーユに差し出した。

「カミーユ兄ちゃん、あーんして」

それを見たカミーユは少しだけ困ったような顔をする。

「もう。確かに酔ってるけど、ちゃんと自分で食べられるよ？」

でも、ありがと」

そう言ってアルフォンスの手からバゲットを食べるカミーユを見て、ギユスターヴは何となくもやもやした気持ちを抱えるのだった。